

接尾辞「～的」の使用と日本語教育への示唆

— 日本人大学生と日本語学習者の調査に基づいて —

A Study of 'na' Adjective with Suffix 'teki' and JSL Teaching —Native and Non-Native Compared

望月通子
MOCHIZUKI Michiko

29 Japanese university students and 34 non-native speakers of Japanese learners (27 Chinese and 7 Koreans learning at Japanese university) wrote short sentences using 'na' adjective with suffix 'teki'. As a result, the following was clarified:

(1) Japanese native university students tend to prefer 'temporary use' to 'fixed use' of suffix "teki." Most of temporary use occurs due to extension of semantic usage which appears as 'teki ni (wa)'. (2) As non-native Japanese learners are learning Japanese under complex environment of classroom and natural settings, they are supposed to experience extensional use. On the contrary, all their sentences adopted the fixed use except for errors. (3) Non-native Japanese learners' errors take place due to the confusion of na-adjective with 'teki' with the adjective with non-'teki' and due to the violation of co-occurrence restriction.

Key words

suffix, 'na' adjectives, learner language, temporary use, fixed use

キーワード

接尾辞、ナ形容詞、学習者言語、一時的用法、固定的用法

1. はじめに

次の(1)(2)のような「わたし的には」とか「気持ち的には」といった表現を時折耳にすることがある。「わたし的には」という表現が2000年の新語・流行語に選ばれてからは、とりわけ広く注目されるようになった。

- (1) このゲームは、わたしのには、結構気に入ってるんです。
- (2) 頑張れって言われても、気持ち的には、どうしていいのかわからないんです。

この「わたしのには」という表現が人々に新味と面白さを感じさせたのは、代名詞「わたし」と「～的」が結び付くという意表を突く結合であり、直接的でなく婉曲的に遠まわしに表現する若者特有のほかし言葉として使用されたことにある。

字音接尾辞「～的」の出自は、明治初期の文明開化期に學術語や翻譯語を造語するために、中国語の助辞「的 de」（中国語の「的」は以下「的 de」と記す）が、形容詞的な語の訳語として二字漢語に付けて用いられたことに始まるとされている。江戸時代（享保～宝暦時代）に流行した中国の白話小説や通俗物の「～的」が國語に出現し（堀口1992：60, 69）、人情本に「幸的」「猿てき」「源てき」など下略した人名・綽名に付ける例が見られるが（前田, 1960）、現在、多用されている接尾辞「～的」は洋語の翻譯によって始まったとされている。山田（1961：28）や広田（1969：37）によると、西周が使用した「觀察的」「実行的」が最も古い用例である（1872～3年頃）。こうした初期の「～的」は硬い語感を有し、漢文訓読体の學術文や評論文に多く出現している。逆に、くだけた談話調の小新聞などには用例がほとんど見当たらないという。その後の「的」の受容については、社説における「～的」の時代推移の分析から、明治後半～大正期にもそれなりに「～的」は使用されており、昭和期に入ってさらに使用頻度が上がり、1945～46年の値が飛び抜けて大きくなっているが、平成年間に入ってからはその値が減少する傾向にあると根岸（2006：26, 29-30）は報告している。また、そのような近年の「的」の使用頻度の低下現象は、一時代の言論の風潮によるものではなく、人々の言語意識の変化に起因するものであろうと付言している。

「～的」の意味が曖昧模糊としていて前接語によって異なること、造語力が強く學術的文章に限らず、上掲の若者言葉のように拡張した用法が増えていることに加えて、日本語能力試験出題基準の語彙リストでは、2級語彙として接尾辞「～的」と「消極的」「比較的」、1級語彙として「静的」しか含まれておらず、しかもナ形容詞が語幹表示であること、国内の日本語教科書ではほとんど取り上げられていないことから、外国人日本語学習者にとって習得が難しいトラブルスポットの一つであるとされている。とりわけ中国人日本語学習者にとっては、日本語の「的」が中国語の「的 de」の借用語であるといった出自も影響し、正の転移にも負の転移にもなる可能性がある。

本研究は、日本人大学生と外国人日本語学習者（中国語母語話者と韓国語母語話者）が作った短文の用例を採集し、これらに基づいて接尾辞「～的」の用法を分析し、日本語教育に対してどのような示唆が得られるかを検証していただくことを目的とする。

以下、まず、第2章では「～的」をめぐる先行研究を概観し、本稿が拠り所とする「～的」の分類や語彙的、語用論的知見を明らかにする。そのうえで、第3章では日本人大学生と日本

語学習者を対象に実施した短文調査の概要・結果・考察について述べる。次いで、最終章ではまとめと今後の課題について述べることにしたい。

2. 先行研究

接尾辞「～的」をめぐる言語学上の厄介な問題は、意味の面では千変万化の意味を表し、統語的にはどのような語とも連結するかのように見えることである。山下（1999）は日本経済新聞の言語データに基づいて「～的」の意味的、統語的な規則性を整理し、3種類の意味機能を提示している。さらに呉人・趙（2008）は、データサイズを広げて3紙の社説データを用いて調査した結果、述語用法の有無によって「～的」の意味機能を規定できるとしている。それに対して王娟（2008）は社説データではなく、新聞の読者の投書欄「声」に現れた「～的」データを分析し、語基の意味によって「的付き形容詞」と「非的付き形容詞」を区別できるとしている。韓国語においても「～的」が使用されるが、朴（2000）は話し言葉における「～的」の使用実態が日本語とどう違うかについてアンケート調査で明らかにしている。最後に、根岸（2007）は、社説の「～的」のデータに基づき、乱用されていると見られている「～的」の使用実態について時代の推移とともにどのように変わっているかを明らかにしている。

以下、これらの研究について概観する。

2-1 山下（1999）「字音接尾辞『的』について」

ここでは、日本経済新聞のCD-ROM資料に基づいて「～的」の意味と機能を3種類に分類して説明している。

- (1) 「～的」は、前接語Aの表す属性概念が後接語Bを限定する役割を果たす。「A的B」は、Bの属性が「A的だと限定され、その基底の意味構造は「BがAの性質を有している」「BがA（の／する）状態である」になる。（例）：慢性的資金不足
- (2) 「～的」は、比喩を表す助動詞と同じような役割を果たす。したがって、「A的B」は「AのようなB」と言い換えることができる。（例）：家族的雰囲気
- (3) 「～的」は、ある種の助詞や複合辞と同じ役割を果たす。「～的」が「AにおけるB」、「AのようなB」、「Aに対するB」などさまざまな意味を担っている。
（例）：時代的要請（時代における要請）、音楽的素養（音楽に対する素養）

山下（1999：33-35）

2-2 呉人・趙（2008）「日本語の接尾辞「～的」の意味論および統語論的一考察」

朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の3紙の社説に出現した「～的」の用例を抽出し、その意味

と用法を考察している。

(1) 「的」の前接語には体言類、用言類、相言類、結合類のいずれもがなりうるが、「的」が付く結合語の用法は連体修飾用法、連用修飾用法、述語用法である。

(2) 「的」は述語用法をもつものともたないものと2つに分類できる。もつものは「～の性質を有する」の意味を表すが(属性の付加的機能)、持たないものは「～に関する」という意味を表す(範囲・カテゴリーの規定的機能)。

(例) 積極的なやり方 ⇔ そのやり方は積極的だ、軍事的設備 ⇔ *この設備は軍事的だ。

呉人・趙 (2008: 23-24, 42)

2-3 王娟 (2008) 「『的』付きナ形容詞の統語機能に関して」

朝日新聞の投書欄「声」の使用実態を調査し、「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞の語基間の類似点と相違点について整理・分析をしている。漢語語基が圧倒的に多く、それ以外の語基(外来語、和語、混種語)の頻度はきわめて低い。一般的に漢語は文章語的、和語は日常語的であるが、非「的」ナ形容詞は「的」付きナ形容詞に比べると日常語的であり、「的」は文章語的な公的なイメージを高める働きがある。

国立国語研究所の『分類語彙表』の意味一覧表に基づき、「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞の漢字二字熟語の語基を分類した結果について報告している。「的」付きナ形容詞の中で高比率を占める意味分野の語基は、「変化」「関係」「支配」「感覚」の4項目で異なり語数の40.5%に及び、その他に「意味」「問題」「趣旨」などが含まれる。一方、非「的」ナ形容詞の中で高比率を占める意味分野の語基は、「感覚」「性格」「状態」「数量」の4項目で37.9%に及び、その他に「快」「驚き」「喜び」などが含まれるとしている。そしてこの結果はある語基が「的」付きナ形容詞であるか、非「的」ナ形容詞であるかを判断する基準として、日本語学習者にとってある程度参考になりうるもので、例えば、「簡単」は状態を表すので非「的」ナ形容詞「簡単」であり、「単一的」とはならない。「飛躍」は「変化」を表すので「的」ナ付き形容詞「飛躍的」となると付言している(王娟 2008: 79)。

2-4 朴大王 (2000) 「接尾辞「的」について一話し言葉における「的」を中心に」

日本語と韓国語の「的」についてアンケート調査を実施し、その結果を報告したものである。接尾辞「的」の意味は日韓語間でほとんど同じであると考えてよいが、用法ではさまざまな違いが見られ、韓国語学習者の場合にはそこに母語の干渉が働いて誤りが生じる可能性があるとしている。韓国語における「的」はもっぱら書き言葉で使用され話し言葉では日本語ほど多用されておらず、その理由について次のように説明している。

(1) 「的」の先行要素の制約がある。日本語は漢字語だけでなく固有名詞や外来語にも自由に

付けられるが、韓国語ではもっぱら漢字語だけである。

- (2) 韓国語の「的」は、書き言葉として使われるという特徴がある。したがって、新聞記事の使用頻度は韓国語のほうが圧倒的に高い。
- (3) 話し言葉における「的」の使用は、10代の高校生と20代の大学生に無意識的に多用されている。

2-5 根岸（2007）「接尾辞『的』の用法の時代推移について」

接尾辞「的」の用法の時代推移について、昭和から平成期にかけての傾向を朝日新聞の社説に基づいて追っている。その方法は、戦争直前の1940年からスタートし、以後は1945年から10年おきに「～的」の用例を抽出してその推移を明らかにしている。終戦直後の値が飛びぬけて大きいのが、当時の言論の風潮が「～的」の使用に反映されていると考えられていること、平成になってからの値は減少傾向にあるが、それは終戦後のような時代の風潮が反映されたものではなく、言語意識の変化によって一時期よりも使用されなくなっていると考えられることなどを報告している。直接連体用法（例：根本問題）が大幅に減少する傾向が強くなり、その代わりに「～的」を用いた直接的でない連体用法（例：根本的問題）の台頭が顕著になった。このように「～的」の直接連体用法を活用すれば、高度で複雑な意味をもった言葉を自由に造語できるようになるが硬い語感を伴ってしまう。日本語の平易化の流れに従って、紙面から生硬な表現が減少して「～的」の連体用法には「な」を介することが増えていることを実証している。（根岸 2006：29-30）。

2-6 接尾辞「的」のまとめと本研究のサーチ・クエスチョン

2章では先行研究を概観したが、接尾辞「的」についてまとめると以下ようになる。

A. 「的」は多義語で曖昧であるが、意味用法に基づき次の3種類に分類できる。

- ① 「A 的 B」の意味：「B が A の性質を有している」「B が A（の／する）状態である」
（例）：「現実的政策」（現実性ももった政策）
- ② 「A 的 B」の意味：「A のような B」
（例）：「父親的立場」（父親のような立場）
- ③ 「A 的 B」の意味：「A における B」「A としての B」「A についての B」「A に対する B」
（例）「大衆的人気」（大衆における人気）「音楽的素養」（音楽に関する素養）

（山下 1999：34-35）

B. 文法機能に基づいて、次の3種類（その他を入れて4種類）に分類できる。根岸（2006：26-27）に基づくが、「断定用法」を「終止用法」と言い換える。

(1) 連体用法

- a. 「～的」が単独で、直接に体言を修飾 (直接連体用法) (例): 学問的見地
- b. 「～的な」の形で体言を修飾 (例): 根本的な原因
- c. 「～的の」の形で体言を修飾 (例): 画期的の政策

(2) 連用用法

- a. 「～的」が単独で、直接に用言を修飾 (直接連用用法) (例): 比較的良好だ
- b. 「～的に」の形で用言を修飾 (例): 積極的に参加する
- c. 「～的と」の形で用言を修飾 (例): 一般的となった
「～的に」「～的と」は助詞の「は」「も」がついて「～的には」「～的とも」の形で用いられることもある。

(3) 断定用法

- a. 断定の「だ」「だった」などが後続 (例): その言葉は屈辱的だった。
- b. 「で」「である」「でない」などが後続 (例): 彼は良心的である。
- c. 「と」が後続 (例): その現象は非常に特徴的といえる。

(4) その他 用例の数が極めて少ない。

C. 辞書への掲載、使用頻度、長期にわたる使用などを目安に、一時的用法と固定的用法に分類できる。

- (1) 一時的用法: 話し手・書き手が「～的」を使って一時的に造語した場合
辞書に掲載されている「～的」は固定的である可能性がある一方で、辞書に載っていない「～的」は一時的の可能性が高い。
(例) 抗議的、死活的、物質的、非民主的、採算的、行き詰まり的
- (2) 固定的用法: 「～的」という形で固定している語をそのまま使用する場合
長期にわたって使用され続けている「～的」は固定的である可能性が高い
(例) 積極的、経済的、国際的、本格的、個人的、本質的、私的 (根岸 2006: 28-31)

D. 「的」は明治期に翻訳のために使用され、以後、学術書をはじめ幅広く使用されるようになったが、近年の使用傾向としては、社説など文章の質を意識する書き手は回避する傾向が顕著になっている。その一方で、「わたし的には」のように話し言葉においても多用されるなど、A(3)類の偽ナ形容詞 (意味分類③) の拡張が著しい。

以上の知見を踏まえ、本研究では以下のリサーチ・クエッションを明らかにしたい。

- Q 1 「的」付きナ形容詞の使い方について、日本人大学生と日本語学習者を比較した場合、それぞれどのような特徴があるか。

Q 2 「的」付きナ形容詞について、とりわけライティングの教材や指導に対して、本研究からの示唆は何か。

3. 調査 1

3-1 調査の概要

3-1-1 対象者

調査 1 の参加者は、日本国内の A 大学に在籍する外国人日本語学習者 34 名（内訳：中国人学習者 27 名、韓国人学習者 7 名）と日本人大学生 29 名である。外国人日本語学習者の学年は 1 回生で、日本語能力は日本語能力試験 1～2 級レベルである。日本人大学生は 1 回生 10 名、3 回生 12 名、4 回生 7 名である。

3-1-2 手続き

調査は 2009 年 12 月に実施した。外国人留学生対象の調査は A 大学の日本語授業の終了 20 分前に筆者自身が調査票を配布・回収した。日本人大学生対象の調査は A 大学の教員に依頼し、担当の授業で実施してもらい、同教員が配布・回収を行った。いずれも所要時間は 15 分程度で、調査方法としては、「的」付き語（句）を使って 5 例の短文を作って調査票に記載してもらった。

日本語学習者データから、134 文（内訳：中国人日本語学習者 106 文、韓国人日本語学習者 28 文）を採集した。また、母語話者データから、日本人大学生の作った 145 文のデータを採集した。

分析の準備として対象とする「的」の分類を行っておく。すでに述べたように「的」を含む形容動詞は複数の文法機能を担っており、体言の修飾語として機能する連体用法、後続の用言を修飾する連用用法、断定の「だ」「で」が後続する終止用法、その他に分類できる。それぞれの出現形を分析するが、調査対象の出現形の具体例を表 1 に示す。

表 1 調査対象とする出現形

連体修飾用法				連用修飾用法				終止用法		
φ	的な	的なる	的の	φ	的に	的には	的にも	的だ	的で	のと

また、書き手自身でさえあまり意識していないことが多いが、前接語（句）との結合が一時的な造語によるものか、それとも許容度が高いものかで、一時的用法と固定的用法に分類できることは、すでに C(1)(2)に述べている。

本研究では、出現形による分析と一時的・固定的による分析を行うことによって、量的およ

び質的に日本人大学生と日本語学習における「～的」についての知識や実際の使用について考察する。

3-2 分析の結果と考察

まず、日本人大学生の145文からなる短文データから145例の「的」付きナ形容詞を抽出した。次にこの中からいわゆるゴミ（「目的（2例）」、「標的（2例）」、「多目的室（1例）」を除外したところ、延べ語数が140となった。一方、日本語学習者の短文データは、134文中から「的」付きナ形容詞135例を抽出した。この中からゴミ（1例）を除外した結果、延べ語数が134となった。

次の表2に示したように、日本人大学生の場合、延べ語数は140、異なり語数は88、頻度2以上が27、頻度1が61であった。

一方、日本語学習者については、延べ語数が134、異なり語数が75、頻度2以上が24、頻度1が51であった。

表2 調査1の分析結果(1)

	日本人大学生	日本語学習者
延べ	140	134
異なり	88	75
頻度2以上	27	24
頻度1	61	51

3-2-1 文法機能による分析と考察

文法機能による頻度計算は、出現形別に表3に示す。また、頻度別の語幹リストを表4に示す。

表3を見ると、日本人大学生の用例も日本語学習者の用例も「的」や「的な」の連体修飾用法が最も多く、次に「的に」類の連用修飾用法が続いており、「的だ」類の終止用法が最も頻度が少ないということがわかる。しかし、より詳細に見ると、大学生の用例には「的な」類の連体修飾用法と「的に」類の連用修飾用法の比率が近似しているのに対して、学習者の用例は「的

表3 出現形による分析結果

	連体修飾用法			連用修飾用法				終止用法			
	φ	的な	的の	φ	的に	的には	的にも	φ	的だ	的で	的と
大学生	62 (45%)			56 (40%)				21 (15%)			
	8	54	0	0	41	14	1	0	21	0	0
学習者	81 (67%)			32 (26.4%)				8 (6.6%)			
	6	75	0	1	26	5	0	1	4	3	0

な」類の連体修飾用法が67%で著しく比率が高いことがわかる。逆に、「的に」類の連用修飾用法も「だ」類の終止用法も比率が顕著に低いことが特徴といえる。「個人的」の頻度は、大学生による用例では2位、学習者では3位であるが、前者では「的に」が4例、「的な」が2例あるのに対して、後者では「的な」が5例、「的に」が2例となっており、ここでも学習者が「的な」を多用する傾向が見られる。

3-2-2 一時的用法・固定的用法による分析と考察

根岸（2006：28）では一時的・固定的による分類の目安として、辞書に掲載されていること、使用頻度が高いこと、長期にわたって使用され続けていることをあげているが、本稿では筆者を含む2名の大学教員と1名の日本語学校教員、計3名で一時的か固定的かについて判別した。表4の日本人大学生の用例（語幹）リスト中、一時的用法と判別したものには下線を施した。

まず筆頭は、最も用例が多い「私^{わたし}的」で、4位の「自分的」11位の「うちの」が続くが、この他に、用例が1つしかないリスト中の「遊び的」「あや的」「学校的」「気分的」「教科書的」「親友的」「世界平和的」「名前的」「初めて聞きました的」「バレンタインデー的」「不可能的」「私ピアノしてました的」なども一時的用法と判別した。これらの大半の出現形は「的に」で、「においては」などに言い換えられる③の意味用法である。既出の先行文献においても、すでに「的」の③の意味用法が若者言葉などとして拡張されていることが指摘されているが、大学生の短文の用例においてもこうした傾向が確認された。

表4 調査1の分析結果(2): 頻度表

日本人大学生
9: <u>私^{わたし}的</u>
6: 個人的
5: 自己中心的
4: 一般的 基本的 <u>自分的</u> 主観的
3: 感動的 私的 初步的
2: 一方的 威圧的 意識的 <u>うちの</u> 家庭的 客観的 合理的 最終的 消極的 将来的 積極的 端的 悲観的 友好的 楽観的 論理的 劇的
1: <u>遊び的</u> アメリカ的 <u>あや的</u> 一時的 犬的 意味的 右翼的 懐疑的 <u>学校的</u> カリスマ的 感覺的 <u>気分的</u> <u>教科書的</u> 協力的 経済的 芸人的 幻想的 現代的 故意的 好戦的 公的 効率的 国際的 社会的 左翼的 社交的 商業的 神秘的 親友的 精神的 世界的 世界平和的 絶対的 大だいの 打算的 知的 抽象的 挑発的 独創的 突発的 名前的 日本の 熱狂的 能動的 能力的 排他的 <u>初めて聞きました的</u> <u>バレンタインデー的</u> 美的 <u>不可能的</u> 文化的 魅力的 民主的 ヨーロッパ的 予算的 楽天的 利己的 料金の 理論的 歴史的 <u>私ピアノしてました的</u>

日本語学習者
8: 私的(中8)
7: 経済的(中7) 個人的(中6+韓1)
6: 現実的(中5+韓1)
5: 私的5(中5) 理想的(中3+韓2)
4: 化学的(中2+韓2) 自発的(中3+韓1) 積極的(中4) 専門的(中2+韓2)
3: 科学的(中3) 基本的(中3) 社会的(中3) 楽観的(中3) 家庭的(中3) 具体的(中3)
2: 一般的(中1+韓1) 合理的(韓2) 公的(中2) 詩的(中1+韓1) 政治的(中2)
物理的(中2) 文化的(中2) 論理的(中1+韓1)
1: 圧倒的1(中1) 安定的(韓1) <u>快適的</u> (中1) <u>快的</u> (中1) 価値的(中1) 環境的(中1)
喜劇的(中1) 教育的(韓1) <u>極端的</u> (中1) 健康的(中1) 合法的(韓1) <u>不可能的</u> (中1)
限定的(中1) <u>権利的</u> (中1) 国際的(中1) 国民的(中1) 時間的(中1) 資金的(中1)
<u>自然的</u> (韓1) 史的(中1) 自動的(中1) 社交的(韓1) 宗教的(韓1) 受動的(韓1)
<u>神経質的</u> (韓1) 人権的(中1) <u>深刻的</u> (中1) 人的(中1) 絶望的(韓1) <u>壮大的</u> (中1)
単眼的(中1) 地理的(中1) 哲学的(韓1) 徹底的(中1) 伝統的(中1) 東洋的(中1)
熱情的(韓1) 抜本的(中1) <u>比較的</u> (中1) 悲観的(中1) 悲劇的(中1) 美的(中1)
不可思議的(中1) 文学的(中1) 本格的(韓1) 漫的(中1) 盲目的(韓1)
ヨーロッパ的(中1) <u>楽的</u> (中1) ろうまんの(韓1)

3-2-3 学習者による用例の誤用分析と考察

日本語学習者による用例の頻度は、正用・誤用にかかわらず計算した。

上述した3名による正誤判定をした後、「的」付きナ形容詞を正用と誤用に分けた。3種類のエラーが確認されたが、以下にその例を示す。

(1) 非「的」ナ形容詞と「的」付きナ形容詞との混同

表4の日本語学習者の用例中、頻度2以上のリストにはエラーと判定されるものはゼロであるが、頻度1の用例中の二重下線を施した「的」付きナ形容詞(語幹)はエラーと判断した。先行文献でも指摘されているように、「的」は通常、状態を表す漢語名詞に付いて結合語をつくるが、これらの語基はいずれもナ形容詞で名詞ではない。以下に「的」付きナ形容詞のエラーの用例とそれらを訂正した非「的」ナ形容詞を示す。

- *快適的な生活→快適な生活 *極端的な思想→極端な思想 *不可能的だ→不可能だ
- *神経質的だ→神経質だ *深刻的な問題→深刻な問題 *壮大的な→壮大な
- *不可思議的な関係→不可思議な関係 *楽的な生活→楽な生活

(2) 名詞と「的」付きナ形容詞との混同

① 「AのB」または「AB」とすべきところを「A的なB」としてしまうエラーである。

- *物理的な本→物理の本 *文学的な研究者→文学の研究者

*比較的な問題だ→比較の問題だ *自然的な現象→自然の現象／自然現象

② 「A 的に (は)」という表現を「A から言う／みると」や「A で」と混同し、「*A 的から」や「*A 的で」としてしまふエラーである。

*日本は経済的で世界第二位になりました。→経済的には／経済で

*経済的から見ると→経済的には／経済から見ると

(3) 共起制約の抵触

各々の語そのものは誤用ではないが、二語間の共起が不自然と判断されるエラーである。例えば、「安定的」は「的」の意味用法②の状態を表し、「安定的に水を確保する」や「安定的な水の確保」といった使い方をする。

*安定的なことがいいですね。→ {安定している／安定的である} ことがいいですね。

上のエラーの「安定的なこと」は「安定していること」または「安定的であること」に言い換えるか、あるいは「安定的な職業」や「安定的な収入」のように「職業」や「収入」などとの共起表現にすれば許容できる。

*京都の風景は美的である。→京都の風景は {美しい／きれいである}。

「美的」は「美的な感受性」「美的価値」「美的見地」「美的な配色」などに見るように、「芸術的な視点から」という意味を表すため、「京都」と「美的」は共起しにくい、「京料理は美的である」のように京料理との共起表現ならば許容される。

4. 調査1のまとめと課題

日本人大学生と日本語学習者による「的」付きナ形容詞の分析・考察の結果、リサーチ・クエスチョン1と2について、次のことが明らかになった。

Q1. 「的」付きナ形容詞の使い方について、日本人大学生と日本語学習者を比較した場合、それぞれどのような特徴があるか。

(1) 日本人大学生は、固定的用法よりも一時的用法を使う傾向が顕著であるが、高頻度のものである。一時的用法の大半は「的」の意味用法③の意味拡張によるもので、「的に (は)」の連用修飾用法である。

(2) 日本の大学の学部留学生は、教室環境と自然環境との複合環境で学んでおり、(1)の日本人大学生の日本語に触れる環境にあるが、少なくとも書き言葉の学習者言語においては全用例中のエラー以外は固定的用法が見られた。

- (3) 日本語学習者のエラーは、非「的」ナ形容詞と「的」付きナ形容詞との混同、名詞と「的」付きナ形容詞との混同、共起制約の抵触によるものが確認された。

Q2. 「的」付きナ形容詞について、とりわけライティングの教材や指導に対して、本研究からの示唆は何か。

- (1) 「的」付きナ形容詞を理解語彙と使用語彙とに分類し、使用語彙については、文章の質を考えた使い方に限定し、過剰使用しないように指導する。
- (2) 社説を読み教材として使用し、そこでの「的」付きナ形容詞の用法に注意を向けさせる。
- (3) 「的」付きナ形容詞の用例における「的」の用法を考えさせ、「的」を使わずに他の表現に言い換える練習を行う。

本稿では、日本人大学生と日本語学習者が書いた短文の「的」付きナ形容詞について調査を実施し、分析・考察を行った。筆者らが構築した「KCOLJ」(Kandai Corpus of Learner Japanese)と「KCONJ」(Kandai Corpus of Native Japanese)を用いた、大学生以外の成人日本語母語話者と外国人日本語学習者(大学生)の書いた小論文における「的」付きナ形容詞の研究の一環として行った研究の一部を報告した。

付 記

本研究は、関西大学海外学術研究員派遣制度の補助金の交付を受けた研究の成果の一部である。

本稿は、科学研究費補助金の交付を受けた研究(基盤研究(C):課題番号19520529, 研究代表者望月通子)の一部として行ったものである。

引用文献

- 王娟(2008)「『的』付きナ形容詞の統語機能に関して」『ニダバ』西日本言語学会 37, 125-134.
- 呉人恵・趙虹(2008)「日本語の接尾辞「一的」の意味論および統語論的一考察」『富山 大学人文学部紀要』19-43.
- 根岸帆和(2007)「接尾辞『的』の用法の時代推移について」『日本文学文化』東洋大学日本文学文化学会 6, 25-35.
- 朴大王(2000)「接尾辞「的」について一話し言葉における「的」を中心に」『言語と文化』名古屋大学国際言語文化研究科日本語言語文化専攻 創刊号, 163-180.
- 堀口和吉(1992)「助辞『的』について」『山辺道』天理大学国語国文学会 36, 59-76, 前田勇(1960)「『てきや』という語」『言語生活』100号
- 山下喜代(1999)「字音接尾辞『的』について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古希記念論文集刊行会 24-38 東京: 明治書院